

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

日本語における補部と付加部の区別を再考する

石 居 康 男

日本語における補部と付加部の区別を再考する

石居 康男

要 旨

Hornstein & Nunes (2008)は、極小主義プログラムの中で、「併合」を「連結」と「標示」の2つの操作に分割し、標示は独立の動機づけがある場合にのみ起こるとする仮説から、英語の焦点拡張に関する補部と付加部の差異が導けることを示している。これは、日本語のとりたて詞の焦点拡張の補部と付加部の差異 (Aoyagi (1999)) にもあてはめられるが、焦点素性を導入すると同時に量子子でもあるとりたて詞には、その作用域が構造から読み取れないという問題が生ずる。本稿は、日本語では音形に反映しない動詞句移動が起こる可能性を提案し、作用域決定については標示付けのタイミングによる解決の可能性を示唆する。

はじめに

日本語は、英語と異なり、補部 (complement) と付加部 (adjunct) の違いを構造的に明示することが難しい言語である。英語では両者の違いを説明するのに、do so や one などの代用表現による置き換えがよく用いられる。しかし、日本語では置き換え表現によって補部と付加部の違いを示すことは甚だ困難である。例えば、英語の do so に相当する日本語の「そうする」が補部と付加部の違いを示すのには有効でないことは、すでに Hasegawa (1988)で指摘されている通りである。英語の one に相当する「の」も同様である。

日本語の名詞句における補部と付加部の問題は別の機会に論ずることにして、本論では動詞句の場合に限定して考察する。日本語の動詞は、英語の場合と異なり、補部の義務性を示すには意味解釈に頼らざるを得ず、また従来置き換え表

現を用いた操作的テストでは補部と付加部の違いを明らかにすることはできないことを第1節で示す。第2節では極小主義プログラム (Minimalist Program) における補部と付加部の取り扱いに関する Hornstein & Nunes (2008)の提案を概観し、その提案に対して日本語の動詞句をめぐる観察が持つ意味合いを第3節と第4節で考察する。第5節はまとめと今後の展開の可能性を述べて締めくくる。

1. 動詞句内の補部と付加部

動詞句内の補部のうち、名詞句が補部として実現している場合が目的語であるが、目的語を取る「他動詞」と目的語を取らない「自動詞」の区別を示すことも日本語では英語ほど簡単ではない。日本語では、目的語の存在を示すには(1)の2つめの文のような例の意味解釈に頼らざるを得ない。

(1) 太郎はリンゴを食べた。花子も食べた。

この文で花子が食べたものはリンゴであり、単に食事をしたということではない。その意味は、目的語を含む構造を想定して、前文の一部を先行詞にして削除が起こると考えることによって導くことができる。この現象を日本語における「動詞句削除 (VP Ellipsis)」の例と考えるか、それとも「項削除 (Argument Ellipsis)」の例と考えるかが、日本語の生成文法研究では依然として争点になっている¹、どのように分析するにせよ、(1)の2つめの「食べた」は見かけ上は自動詞の「食べた」と同じであり、これが他動詞であるというのはその意味解釈から導き出されるものにすぎない。

さらに、冒頭で触れたように、英語の *do so* のような置き換え表現を用いた方法も日本語では上手くいかない。(2)のように、動詞句の補部の代表選手とも言え

¹ Otani & Whitman (1993), Hoji (1998), Saito (2007), Takahashi (2008)等を参照されたい。

る目的語が「そうする」に含まれない容認可能な例文は、容易に作ることができる²。

- (2) a. 太郎は自分の教科書を破った。花子もそうした。
b. 太郎は自分の教科書を破った。花子は目の前に置いてあった本をそうした。
- (3) a. John read a book in the library, and Mary did so in the playground.
b. *John read a novel in the library, and Mary did so a magazine in the playground,

英語では、(3a)と(3b)の対比が示すように、補部である目的語は *do so* に含まれなければならないが、対応する日本語の例である(2a)と(2b)の間に容認可能性の大きな差はない。

このように、補部の例として目的語を考えただけでも、日本語では義務性や置き換え表現を用いた検証方法では付加部との差異を引き出すことはできないことがわかる³。これらは補部と付加部の違いを説明する際に英語では必ず引き合いに出される特徴だが、日本語では英語のように簡単にはいかないのである。

2. 極小主義プログラムにおける補部と付加部

極小主義プログラムでは、併合 (Merge) の結果生ずる統語対象 (Syntactic Object) の標示 (Label) の問題が大きな関心事の1つとなっている⁴。Hornstein & Nunes (2008)は、併合を連結 (Concatenate) と標示付け (Label) という2つの操作に分解し、付加部は(補部と異なり)主要部の投射と「連結」されるだけで全体の「標

² より詳細な議論については Hasegawa (1988)が参考になる。

³ 同様の結論は、話題化 (Topicalization) と関係節化 (Relativization) を用いて論じた Harada (1991)にも見られる。

⁴ 例えば Chomsky (2013)を参照。

示」は必要な場合にのみなされるという分析を提案している⁵。これにより、例えば、動詞句前置（VP Fronting）の際に付加部が随伴して移動するか否かは、付加部を含む動詞句連鎖が標示を受けるか否かと連動することになる。すなわち前置された動詞句は共に移動した付加部を含めて標示付けされているのに対して、前置されずに置き去りにされた付加部は標示付けされた動詞句の中にないと考えるのである。

例えば、(4a)と(4b)はそれぞれ角括弧で囲った部分のみが V(=VP)という標示を受ける。

- (4) a. [eat the cake] he did in the yard
 b. [eat the case in the yard] he did
 c. *[eat] he did the cake in the yard (Hornstein & Nunes 2008: 66)

(4a,b)の動詞句前置が適用される直前の動詞周りの構造は次のようになる。(^という記号は「連結」されていることを示す。)

- (5) a. [v eat^the-cake]^in-the-yard
 b. [v [v eat^the-cake]^in-the-yard] (Hornstein & Nunes 2008: 66)

(5a)と(5b)ではともに in the yard が (^で示されているように) eat the cake に連結されているが、それを含む連鎖全体が標示を受けているのは (角括弧の有無の違いで示されているように) (5b)のみである、(5a)からは(4a)しか派生できないし、逆に(5b)からは(4b)しか派生できない⁶。

⁵ この論文は Hornstein (2009)の第4章に若干の改訂を施されて再録されているが、本論では Hornstein & Nunes (2008)のほうを言及する。

⁶ (5b)で内側の V を移動することは「上位範疇優先の原理 (A-over-A Principle)」の違反になるからである。

(4c)の非文法性は、補部を含めた連鎖に標示が与えられないと以下のように補部の解釈ができなくなってしまうためと説明される。まず、(6a)の論理形式を(6b)のように考える。述語で表現される出来事や行為を具体的に個別的存在者と見なすという Donald Davidson の考え方を拡張した意味論的立場で、e は neo-Davidsonian argument と呼ばれる出来事項の変項である⁷。

- (6) a. John ate the cake in the yard.
b. $\exists e$ [eating(e) & subject(John, e) & object(the cake, e) & in-the-yard(e)]

付加部の in the yard が出来事を示す e を項にとる述語として扱われており、「e は in-the-yard で起こった」という意味で出来事を直接修飾しているのに対して、John や the cake はそれぞれ「John は e の主語である」「the cake は e の目的語である」というように、「主語である」「目的語である」という述語を通して出来事と関係づけられる⁸。そして、主語と目的語という概念は、例えば標準理論 (Chomsky (1965)) の定義で述べるなら「S に直接支配された NP」と「VP に直接支配された NP」のように、構成素の標示を前提にして定義される。もし「動詞+名詞句」という連鎖が標示を持たなければ、この名詞句は「目的語」として認定されないことになり、正しい意味解釈が与えられない。補部があればそれを含めた連鎖に標示付けが義務的となることは、このようにして導き出される。

さらに、(5a)と(5b)の2つの可能性、より一般的に言うと、付加部が動詞の投射に連結された場合に、それを含む連鎖全体が標示を受けるかどうかは、随意的ではなく必要な場合に限られるという意味で経済性の原理に従うと Hornstein and Nunes (2008)は主張する。その根拠の1つが(7)と(8)の対比である。

⁷ この考え方の詳細については、例えば Parsons (1990)を参照。

⁸ 「主語」や「目的語」ではなく「動作主 (agent)」や「被動者 (patient)」といった概念が使われることもあるが、構造的な関係が関わるものである限り、ここでの議論に影響はない。

- (7) a. John bought BOOKS.
- b. John bought BOOKS in that shop.
- (8) John bought books in that SHOP.

(7)の2つの文は(i) What did John buy? (ii) What did John do? (iii) What happened? のいずれの問いの答えにもなるという点で「無標 (unmarked) な強勢 (stress) パターン」を持つ。すなわち、(7b)の *in that shop* という付加部には最も目立った (prominent) 強勢が置かれることはないという点で、付加部の存在は中立的な文強勢のパターンに影響を与えない。このことは、*in that shop* が連結はされているが、それを含めた連鎖全体には標示が与えられない、言い換えれば、付加部は「連結」されているだけで、構造に統合されていないために、焦点に関わる強勢の付与に際してその存在は無視されたと考えることで導き出される。

仮に付加部内の語に最も目立った強勢が与えられたとしても、同時に付与される焦点素性 ([+Focus]としておく) が前置詞句 (PP) を超えて、より上位の構成素 (VP, vP, TP) に拡張されることはない。したがって、(8)が上記の(i)(ii)(iii)のいずれの問いの答えにもならず、*Where did John buy books?*という問いの答えにしかならないという事実も説明される。

ところが、動詞句前置を行うと大変興味深い事態が観察される。

- (9) [Context: *What will John do?*]
 - a. He will play SOCCER on Sunday.
 - b. #He will play soccer on SUNDAY. (Hornstein & Nunes 2008: 73)
- (10) [Context: *What will John do?*]
 - a. #Play SOCCER on Sunday is what he'll do.
 - b. Play soccer on SUNDAY is what he'll do. (Hornstein & Nunes 2008: 73)

(9)の文脈で適切な答えとなるためには、焦点が VP でなければならない。すでに説明したように、on Sunday は連結されるだけで標示付けは行われないので、Sunday に置かれた焦点が VP まで拡張することはない。他方、soccer は補部なので連結されるだけでなく連鎖全体が標示を受ける必要がある。そのため、soccer に置かれた焦点は VP まで拡張でき、What will he do?の適切な答えとなりうる。(9a)と(9b)の対比はこのように説明される。

しかし、(10)ではパターンが逆転する。与えられた文脈の質問の答えとして(10b)が適切であるという事実は、この文においては on Sunday という PP が持つ焦点が VP まで拡張していることを示している。付加部は、通常、動詞の投射に連結されるだけで標示付けはされないが、擬似分裂文の派生に伴う動詞句前置が適用されているこの例では、前置という統語操作を可能にするために on Sunday を含む連鎖全体(VP+付加詞)が標示付けを受けている必要が生ずる。なぜなら、標示を持たないものには統語操作は適用できないからである。そのため、on Sunday が持つ焦点が標示を得た「VP+付加詞」という連鎖全体に拡張され、連鎖全体が What will John do?という問いに対する適切な答えとなる。逆に、補部である目的語に強勢が置かれた(10a)はこの文脈では不適切になる。前置された連鎖全体が(VP という)標示を持つ場合は、付加部内の名詞に最も目立った強勢を置くパターンが無標の強勢パターンとなるからで、これは、(11a)のように無標の語順で VP もしくは TP が焦点になるためには、動詞に強勢を置くことはできないのと同じ理由と考えられる⁹。(11a)は動詞のみに焦点を持たせることが適切な文脈以外では用いることはできない。

⁹ この点についての詳細な分析と議論は Cinque (1993), Reinhart (1995), Zubizarreta (1994)等を参照。ここでは Zubizarreta の分析に沿ってこの仕組みを簡単に述べておく。焦点の拡張は句構造上繰り返し埋め込みが起こる側(英語の場合は右側)から拡張する。したがって、目的語の主要部に焦点素性が付与された場合、NP や DP のみならず、VP (や場合によっては文全体 (=TP)) も焦点となりうる。このプロセスは「拡張」であって、左右への移動はしないので、目的語に付与された焦点素性が動詞に移動することはない。また本論では議論の対象外であるが、主語に付与された焦点素性が文全体に拡張することがないことも同様に導き出される。

(11) [Context: *What did John do?/what happened?*]

a. #He KISSED Mary.

b. He kissed MARY.

(Hornstein & Nunes 2008: 74)

以上の議論をまとめると、付加部は連結されるだけで、標示付けは経済性の原理に従い、動詞句前置を適用する場合のように、独立の理由で標示が必要となる場合に限られるということになる。次節では、この分析に基づいて、日本語における補部と付加部の問題を再考したい。

3. 日本語で補部と付加部の対比が現れるとき

前節で紹介した英語の焦点の拡張の仕組みは、日本語にも類似したものがある。しかし、日本語で焦点を導入するものは、強勢 (stress) のような超分節的な音韻特徴ではなく、とりたてて詞 (「も／さえ」) である。それが補部と付加部に付加された場合をそれぞれ考察すると興味深い結果が現れる。「も」を例にして、まずそれが目的語に付いた場合を考えよう。

(12) 太郎は本も読みました。

この文は、「太郎は新聞に加えて、他に何を讀んだか」という文脈で使えることはもちろんだが、「太郎は野球をしたことに加えて、他に何をしたか」という文脈でも使える。青柳 (2006)は前者の解釈を「狭い焦点」、後者の解釈を「広い焦点」と呼んでいる。「広い焦点」の場合には、「も」は見かけ上は「本 (を)」という目的語 (補部) に付加されているが、意味解釈上は目的語と動詞からなる動詞句全体に焦点が拡張していることになる。

ところが、これらのとりたてて詞が付加部に付加された場合には焦点の拡張が起こらないことを Aoyagi (1998, 1999)が指摘している。

(13) 太郎は図書館でも本を読みました。

この文は「太郎は教室以外にどこで本を読んだか」という文脈では使えるが、「太郎は体育館でバスケットボールをしたこと以外に何をしたか」という文脈では使えない。この事実は「図書館で」という付加部に付いた「も」がもたらす焦点が動詞句に拡張することはないことを示している。


このように、日本語の補部と付加部の区別がとりたて詞の意味解釈の違いに現れることが Aoyagi (1998, 1999)によって指摘されている¹⁰。この現象は前節で見た Hornstein & Nunes (2008)の補部と付加部に関する極小主義プログラムの分析に関してどういう理論的含意を持つだろうか。

Hornstein & Nunes (2008)の分析では、付加部は特に理由がない限りは動詞の投射に連結されるだけで、連結の結果生じた連鎖に標示は与えられない。焦点素性が拡張するのは補部が焦点素性を持つ場合のみであり、付加部に付与された焦点素性はそこにとどまる点は日本語でも同様である。しかし、英語の場合と極めて類似した特徴を示すこの現象が、詳しく見ていくと、第2節で紹介した Hornstein & Nunes の分析に対して問題を提起する。

日本語のとりたて詞がもたらす焦点の拡張の仕組みが英語の場合のように焦点素性の句構造上での拡張 (propagation) にすぎないのであれば問題ないが、とりたて詞の役割はそれだけではない。とりたて詞は焦点素性を導入すると同時にそれ自身「量子化 (quantifier)」の一種である (Kuroda 1965)。その事実が Hornstein & Nunes (2008)の分析にどのような問題を提起するかをここで考えてみたい。

青柳 (2006)では、とりたて詞が文中のどの構成素を焦点に取り得るかを決定する要因として、(i)とりたて詞自体が取る作用域 (scope) と(ii)とりたて詞とは本来独立に存在する焦点 (focus) の2つを挙げている。まず、(i)について考えよう。

¹⁰ 補部と付加部の非対称性を示す他の例については Aoyagi (1998, 1999)を参照されたい。

- (14) a. [TP [vP [DP 太郎] [VP [DP [NP 本] D+も] 読む] v] た]
 b. [TP [vP [DP 太郎] [VP [DP [NP 本] D+ti] 読む] v+も] た]
- 

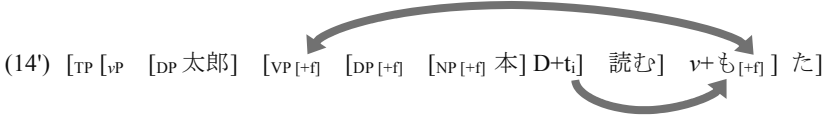
(12)は、(14a)で目的語位置にある DP の主要部 D に付加されていた「も」が、(14b)に示したように LF で移動し v に付加される¹¹。この移動先の位置で「も」は VP を c 統御 (c-command) するため、「も」の作用域は VP まで拡張する¹²。一般的に、量化子の作用域はその c 統御領域と一致するので、量化子でもあるとりたて詞の作用域は c 統御という構造的な概念に基づいて決まるはずである。この概念は「支配」という概念と同様に、標示を持った構成素間に成り立つ関係概念である。したがって、作用域が拡張するためにはその領域は標示付けされていなければならないことになる。

(ii)の焦点の問題については、任意の語に与えられた焦点素性[+focus]が、より大きな構成素へと拡張すると考える。これは、英語において最も目立った強勢に付与される焦点素性[+focus]が句構造上を拡張していくプロセスと同じと考えてよい。英語との大きな違いは、英語では強勢の付与と同時に焦点素性が付与されるのに対して、日本語の場合はとりたて詞が固有の性質として焦点を要求するため、焦点素性が(任意の要素に)付与されるという点である。焦点素性はどこに付与してもよいが、派生の後の段階で(LFあるいは意味解釈に関わるインターフェースで)焦点素性に関して適切な「一致(agreement)」関係が成立しなければならない。それが上手くいかない場合には派生は(極小主義プログラムでの)「破綻」をするという結果になる。(12)の「広い焦点」の場合を示す(14)におい

¹¹ (14b)の移動ではとりたて詞が動詞を飛び越えているが、青柳(2006: 15-24)では、とりたて詞は主要部(=X⁰)であると同時に最大投射(=X^{max})であるため、ロマンス語の接語代名詞(clitic pronoun)と同様に、X^{max}として移動しX⁰として着地すると分析されており、主要部移動制約(Head Movement Constraint, cf. Baker(1988))の違反にはならない。

¹² これは作用域がVPまで拡張する場合である。「も」がT(た)まで上昇すればvPが作用域となる。

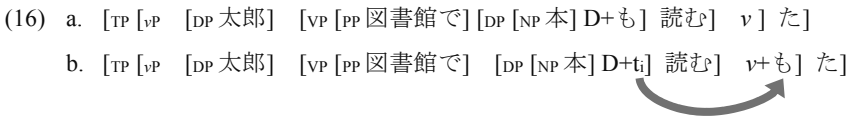
て、下の矢印はとりたて詞の上昇を、上の矢印は素性の一致を示す¹³。また、範疇名に添えられた[+f]は上記の焦点素性でそれが「本」から VP まで拡張していることを示す。「も」に付与された[+f]はとりたて詞が元々持っている焦点素性で、それが VP まで拡張した[+f]と正しく一致関係を持つため、この派生は収束する。



以上の(i)と(ii)の2つの要因が関わった結果、とりたて詞の作用域に焦点が入ることによって、とりたて詞と焦点との関連づけ (association with focus) が起こる。これは、とりたて詞が固有に持つ焦点素性[+focus]と文中のある構成素(焦点)に付与された[+focus]との素性の一致と捉える。以上が青柳 (2006)の分析の骨子である¹⁴。

さて、Hornstein & Nunes (2008)の枠組みのもとで、日本語のとりたて詞の問題を再考しよう。(14)では、「も」の作用域は動詞と補部のみであるため、前述の出来事項と関係づけた意味解釈という、焦点の解釈とは独立の理由で VP という標示が与えられる。しかし、付加部は出来事を直接修飾できるという理由で標示付けの必要がないため付加部も含まれている連鎖には標示が与えられない。

(15) 太郎は図書館で本も読んだ。



¹³ 「も」はTまで上昇することも可能であるが、ここで問題にしている解釈ではvまでとする。とりたて詞の種類によって、どこまで上昇できるかが異なる。詳細は青柳 (2006: 140-145)を参照。

¹⁴ Aoyagi (1998, 1999)では、本節で見た焦点の拡張における補部と付加部の差異はとりたて詞の移動が従う制約に帰される。例えば Aoyagi (1999)では、とりたて詞の移動に関しても、「取り出し領域条件 (Condition on Extraction Domain, CED)」(cf. Huang (1982))を想定し、補部からの移動は可能であるが、付加部からの移動は禁止されるというところから、問題の差異を導いている。

例えば、(15)は「太郎は図書館で新聞に加えて何を読んだか」という文脈で使えるだけでなく、「太郎は運動場で野球もしたことに加えて、他に何をしたか」という文脈でも使える。後者の解釈の場合には、「も」が(14b)と同様(16b)のように *v* に付加された結果「も」に *c* 統御される VP がその作用域となるが、第2節で紹介した Hornstein & Nunes の枠組みでは、(16b)の VP に相当する部分には標示が与えられないことになってしまう¹⁵。したがって、*c* 統御という概念が、「支配する」と同様に標示を持った構成素間に成立する関係概念である限り、焦点の拡張にかかわる「作用域」の概念を主要部移動と *c* 統御に基づく定義で導くことはできなくなる。

このような問題が生ずるのは、日本語のとりたて詞が英語の強勢のように焦点素性を派生に導入する働きを持つだけでなく、同時に量子子でもあるという特異性による¹⁶。このとりたて詞が持つ二面性を Hornstein & Nunes (2008)の枠組みで捉えることは可能かという点については第5節で現時点での見解と今後の研究の方向を示したいが、その前に次節で以下の問題を考えることにしたい。

連結された付加部を含む連鎖全体に標示付けが行われるのは、焦点解釈とは独立の理由がある場合に限られるのであった。このように考えるのは、もし焦点解釈の必要性自体が標示付けの動機づけになるのであれば、焦点の拡張可能性に関する補部と付加部の差異は消失してしまうからである。統語的操作は標示を持った統語対象にしか適用できないという前提に基づき、標示付けを独立に動機づけるものとして Hornstein & Nunes (2008)が挙げていたのは(擬似分裂文に伴う)動詞句前置であった。日本語にはこれに対応する現象として何を考えたらよいだろう

¹⁵ 「太郎は」の位置はここでは問題にしない。便宜上「太郎」は主語位置に置いてある。

¹⁶ とりたて詞が量子子の一種であることは、例えば「さえ」を用いた次の例で示すことができる。

(i) トヨタさえがその取引先を訴えた。

この文において「そこ」は束縛変項の働きをしていることは、この文の意味解釈を考えると明らかであろう。

うか。

4. 日本語の動詞句に作用する統語現象

日本語に動詞句前置があるかということ、英語の動詞句前置とまったく同じではないが、似たような働きをする統語現象がある。前節で取り上げたとりたて詞が、補部や付加部の直後に挿入されるのではなく、動詞の語幹の直後に挿入される場合である¹⁷。

- (17) a. 太郎が宿題を出しさえした (こと)
- b. 太郎が宿題を出しもした (こと)

これらのとりたて詞が介在するために動詞の語幹と時制辞の間の隣接性が妨げられて、英語の Do 挿入 (*Do-Support*) に相当する「Su 挿入 (*Su-Support*)」が起こる (Kuroda 1965)。問題のとりたて詞は、形態音韻論的には動詞の直後に挿入されているが、意味論的には「宿題を」という目的語も含めた動詞句全体をその焦点とすることもできる。動詞句全体を焦点にすることが明示されているという点では、(17)は意味解釈の点で英語の動詞句前置に近いケースと言えるが、英語とは異なり、これらの動詞句が主語を飛び越えて文頭に置かれるとあまり据わりがよくない。

- (18) a. ??宿題を出しさえ太郎がした (こと)
- b. ??宿題を出しも太郎がした (こと)

そこで、この移動は音韻部門に派生が分岐した後に、すなわち LF で起こるも

¹⁷ この現象の詳細な統語的分析としては青柳 (2006: 135-148)を参照。

のと考えてみよう。(19a)のように TP の上に Focus という機能範疇の投射があるとし、(19b)のように LF で FocusP の指定部に VP が移動すると仮定すると、英語の動詞句前置の場合と並行的な分析が可能になる¹⁸。

(19) a. [_{FocusP} [_{TP} [_{vP} NP [_{VP} ... NP V] v+も/さえ]] T] Focus]

b. [_{FocusP} [**VP ... NP V**] [_{TP} [_{vP} NP t_i v+も/さえ]] T] Focus]



これを用いて付加部が関わる例を考えよう。ここでは「も」を使って示す。

(20) 太郎が庭で箸でケーキを食べもした (こと)

この文は、どのような文脈に置かれているかによって、「庭で箸でケーキを食べた」という太郎が行った行為の位置づけに関して、幾通りかの解釈があり得る。まず、例えば「家の中で自転車を乗り回した」ことに加えて「庭で箸でケーキを食べた」という解釈が可能である。この解釈では、(21)に示したように、「ケーキを」という目的語(補部)はいうまでもなく、「庭で」と「箸で」という付加部も含めた動詞句全体に「も」が付加されている解釈になる。2つの付加部がともに V(=VP)という標示を受けた構成素内に含まれていることになる。

(21) 太郎が [_v庭で箸でケーキを食べ]もした (こと)

もう1つの解釈は、例えば「庭で縄跳びをした」ことに加えて「庭で箸でケーキを食べた」という場合である。この解釈では「庭で」は「も」が付加されている VP の外にある。(22)に示したように、「庭で」は V(=VP)という標示付けをされ

¹⁸ ここでは、日本語には抽象格付与のための名詞句移動はないと考えるので、主語は元位置 (vP の指定部) に位置すると仮定する。

た連鎖に含まれていないが、「箸で」と「ケーキを」は V(=VP)という標示付けをされた構成素に含まれている。

(22) 太郎が 庭で [v 箸でケーキを食べ]も した (こと)

さらに、「庭で箸で枝豆を食べた」ことに加えて「庭で箸でケーキを食べた」という解釈も可能である。この場合には補部である「ケーキを」のみが標示付けされた V(=VP)に含まれていることになる。2つの付加部はともに動詞に連結はされているが標示付けは受けていないとってよい。

(23) 太郎が 庭で 箸で [v ケーキを食べ]も した (こと)

ここまで見て来たことをまとめると、「も」が動詞語幹の直後に生起している場合、付加部は「も」が付加される範囲に含まれても含まれなくてもいいということになる。この付加部の意味解釈に関する自由度は Hornstein & Nunes (2008: 67) が英語の動詞句前置に関して挙げている次の例に対応すると考えることができる。

- (24) a. [eat the cake] he did in the yard with a fork in the afternoon
b. [eat the cake in the yard] he did with a fork in the afternoon
c. [eat the cake in the yard with a fork] he did in the afternoon
d. [eat the cake in the yard with a fork in the afternoon] he did

このように考えると、日本語では LF での移動であるため、線形順序は変わらないが、実は解釈に応じて前置されている連鎖が異なり、英語の動詞句前置の場合と同様に、移動される場合に限って移動される部分の標示付けが義務的となっていると分析することができる。そして、この LF での動詞句移動を動機づける

のはとりたて詞が持つ「作用域」との関わりであろう。標示を与えられて初めてとりたて詞にc統御されることができ、それによってとりたて詞との関連づけが起こるのである¹⁹。例えば、「も」は最大でvPを作用域にすることができるが、Hornstein & Nunes (2008)の枠組みでは、付加部が焦点に含まれるかどうかは標示次第ということになる。その標示はLFでの動詞句移動の適用によって初めて与えられると考えるわけである。なぜなら標示がなければ移動の対象が決まらないからである。

では補部は必ず「も」の焦点に含まれなければならないかという、事情はやや複雑である。次のような例があるからである。

(25) 太郎はその本を買いもしたし、読みもした。

この例では「その本を」が共通の目的語で、「も」が対比しているのは「買う」と「読む」という動詞だけである。この例だけ見ると、補部と付加部の間に解釈上の違いはないように見える。しかし、(25)のような例では、「も」が統語的に付加されているのが動詞句(VP)ではなく、(26)に示したように、動詞(V)だけであると考えることができる。この場合は、動詞と「も」がまず併合され、動詞+「も」が補部と併合されると考えるのである。

(26) 太郎は その本を [[v 買い]-も] したし、[[v 読み]-も] した

つまり、ちょうど英語の(11a)のように、動詞だけに焦点が付加されていることになるが、主要部後続型の日本語では、動詞句全体に焦点が付加されている場合と

¹⁹ 「も」や「さえ」がc統御するのは移動後のVPではなく、元位置のVP(痕跡)であると考えられる。元位置で標示を受けて初めて移動が可能になるとすると、痕跡位置でVPという標示を持っていることになる。

形態音韻論的には同じ形をとるため、補部が付加部と同じような振る舞いをしてるように見えてしまうのである。

(25)/(26)のような例は別にして、本節で提示した分析の方向性が正しければ、日本語にも（ある種の）動詞句移動が存在することを示唆する新しい議論を提出したことになる。

5. まとめと今後の展開の可能性

「付加部」の取り扱いに関する Hornstein & Nunes (2008)の新しいアプローチの最も興味深い経験的帰結は、動詞句前置という統語的操作が焦点の拡張に関して動詞句内での付加部の役割を変えてしまうという事実であろう。この焦点の拡張現象は、日本語ではとりたて詞の用法の1つとして現れる。すなわち、英語の超分節的特徴の代わりに、日本語では「とりたて詞」という形態音韻論的要素が焦点素性の派生への導入を促すのである。

しかし、日本語のとりたて詞は同時に量子子でもある。そのため、とりたて詞は「作用域」を持つ。量子化の「作用域」という概念はそのc統御領域と定義されるのが通例だが、標準理論の枠組みで言えば、c統御は句構造標識における節点間の関係の1つである。標示付けを経済性の原理に従う操作と考え、付加部の併合は独立の動機づけがない限り「連結」のみで「標示」は伴わないと考え、日本語のとりたて詞が量子子として持つ作用域が定義できない場合が出てきてしまう。英語の強勢のように焦点素性[+focus]のみが関わる場合には、その拡張現象の実態は、Hornstein & Nunes (2008)の分析を支持する根拠にもなったが、量子子としての働きも兼ね備えている日本語のとりたて詞の作用域決定には彼らの分析は当てはめられない。

それでは、焦点の拡張に関して見られた補部と付加部の相違点が日本語と英語の両方に共通して見られることと作用域の問題の両方を捉えるにはどう考えたらよいか。1つの可能性は、焦点の拡張に関しては共通の仕組みが両言語に働いて

いる（この点では「付加部」は連結されるだけで、標示は伴わない）が、日本語では焦点の導入を促すとりにて詞が同時に量子子でもあるために、その作用域の決定のためには付加部が連結された後に標示も行われるということである。この一見相反する要請を満たすおそらく唯一の可能性は、それを標示のタイミングの違いに帰することであろう。青柳（2006）でも指摘されている通り、焦点の拡張は派生内で音韻部門に情報が送られる前、すなわち統語部門で行われるのに対して、作用域の決定はLF部門で行われる。Hornstein & Nunes (2008)が主張するように、標示付けが経済性の原理に従うのであれば、その適用も必要に迫られるまで行われないと考えるのは自然な解釈であろう²⁰。この考え方で行けば、日本語における焦点の拡張に関する補部と付加部の違いは英語と同様の仕組みで導き出されるが、LF部門では補部の場合も付加部の場合も標示付けが必要になり作用域が決定されるということになる²¹。この可能性の詳細な検証は稿を改めて論じたい。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi (1998) *On the Nature of Particles in Japanese and Its Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Aoyagi, Hiroshi (1999) "On the Association of Quantifier-like Particles with Focus in Japanese," *Linguistics: In Search of the Human Mind—A Festschrift for Kazuko Inoue*, ed. by Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, 24-56, Kaitakusha, Tokyo.
- 青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房，東京。

²⁰ このことは、「主語」や「目的語」といった概念の定義に必要な構成素の標示は最初から（GB理論（Chomsky 1981）でいうD構造で）必要であるのに対して、「作用域」といった概念の定義に関連する構成素の標示はLFになってから行われることを示唆する。Chomsky (2007, 2008)が「意味論の二重性（duality of semantics）」と呼んだ人間言語の特質と密接に関連する問題である。

²¹ この標示付けのために、第4節で提案したLFでの移動がここでも行われるのかどうかは今後の検討課題としたい。

- Baker, Mark (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press, Chicago.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces + Recursion = Language? Chomsky's Minimalism and the View from Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational issues in linguistic theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Cinque, Guglielmo (1993) "A Null Theory of Phrase and Compound Stress," *Linguistic Inquiry* 24, 239-298.
- Harada, Yasunari (1991) "On the distinction between complement and adjunct in Japanese," *The Sixth Japanese-Korean Joint Conference on Formal Linguistics: Proceedings of the Sixth Japanese-Korean Joint Workshop*, ed. by Akira Ikeya, 35-48, Logico-Linguistic Society of Japan.
- Hasegawa, Yoko (1988) "Question Pull: A Diagnostic Test for the Complement/Adjunct Distinction in Japanese," *Proceedings of the Fourteenth Annual Meetings of the Berkeley Linguistics Society*, 66-77.
- Hoji, Hajime (1998) "Null Objects and Sloppy Identity in Japanese," *Linguistic Inquiry* 29: 127-152.
- Hornstein, Nobert (2009) *A Theory of Syntax: Minimal Operations and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hornstein, Nobert and Jairo Nunes. (2008) "Adjunction, Labeling, and Bare Phrase Structure," *Biolinguistics* 2.1: 57-86.

- Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*,
Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, Shige-yuki (1965) *A Generative-Grammatical Studies of the Japanese Language*,
Doctoral dissertation, MIT.
- Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) "V-Raising and VP-Ellipsis," *Linguistic Inquiry*
22: 345-358.
- Parsons, Terence (1990) *Events in the Semantics of English*, MIT Press, Cambridge,
Mass.
- Reinhart, Tanya (1995) *Interface Strategies*, OTS Working Papers in Linguistics, Utrecht
University.
- Saito, Mamoru (2007) "Notes on East Asian Argument Ellipsis," *Language Research* 43,
203-227.
- Takahashi, Daiko (2008) "Noun Phrase Ellipsis," *The Oxford Handbook of Japanese
Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 394-422, Oxford
University Press, New York.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1994) "The Grammatical Representation of Topic and Focus:
Implications for the Structure of the Clause," *University of Venice Working Papers
in Linguistics*, Vol. 4, No. 1, 97-126.